ふれあい

題字　林　邑一

第14号
平成4年3月28日
阿品台地区
コミュニティをすすめる会
阿品台公民館
(TEL39－4338)

阿品台地区人口世帯数
平成4年3月2日現在
人口　11,763人　[男5,651人 女6,112人]
世帯数　3,405世帯

「ふれあい」は先づ「あいさつ」から

阿品台地区
コミュニティをすすめる会
会長　山本治喜

昭和五十四年にニュータウンに転居して以来、阿品台の住民は地御前地区コミュニティ推進協議会の一員として、地御前公民館へ出かけておりましたが、昭和五十六年八月に地御前地区から独立した阿品、阿品台地区コミュニティをすすめる会は、二年後の昭和五十八年六月に更に分離独立して、現在の阿品台地区コミュニティをすすめる会として発足しました。

爾来、阿品台に住む私達は、老若男女を問わず皆この一員となり、「ふれあい」をすすめてまいりました。文化、体育、広報、福祉、青少年、婦人の六部に昨年から老人部が加わって七部で「ふれあい」の事業を進めております。

そもそも「ふれあい」は、常に一人ひとりの「心」が中心になると思います。

この阿品台に住み、縁あって、見も知らなかった約一万二千人の方々と出会いました。そして皆、「健康で住みよい町」になって欲しいと念願しつつ暮らしております。

一見、どんなに楽しそうにしている方でも、人間である以上、誰でも何か困っているものです。困っている状態は、隣同志でもなかなか分からないのが普通です。そこで、お互いに「助け合い」ましょうと言っても、相手が何に困っているか、又、相手がどんな方かが分らないと何もできません。それが分るためには、平素からの「心のふれあい」が大切です。

「心のふれあい」の具体的な表現の第一歩、それは「あいさつ」だと思います。「論語」の中に「爾（なんじ）その羊を愛す、我（われ）その礼を愛す。」と言う言葉があります。弟子の一人が、生活に必要な羊を何よりも大切にしておりましたので、孔子が、人の基本になる、そして、今忘れかけている「礼」を大切にせよと諭されたものと解しております。経済の発展のみを追いかけ、心の豊かさを忘れ、欲にのみ走りかけている現在の世相に、警鐘を乱打してくれたのではないかとさえ私には思えます。

「あいさつ」を何故しなければならないかを始め、「あいさつ」の仕方は家庭で、そして総括的なことは学校で教えられました。今でも同じでしょうが、なかなか「あいさつ」が外で聞かれません。これは知らない人同志だからでしょうか。

テレビで、例えば歌手がステージに立ち、先づ、深々と頭を下げて礼をします。そして一曲歌い終えると「ありがとうございました。」と又深々と頭を下げます。歌も良いが、あの姿も又ほんとうに良いものです。

私は朝夕の散歩のとき、児童、生徒に学生さん、そして勤めに急ぐサラリーマンの方達に出会います。朝は「おはよう」ではなく、「おはようございます。」と頭を下げて声を出します。皆さんあいさつしてくれます。初めての時は怪訝（けげん）そうな顔をした人でも、二回、三回となると必ずあいさつをしてくれます。これで相互が充分理解し得たとは思いませんが、「ふれあい」はできたと思います。

私の少年時代（昔）は、「あいさつ」は若輩から年長者へ、即ち、下から上へというのが常識でした。昔は年長者が威張っていました。現代は、昭和二十年の敗戦という断層を経て、いろんなことにブランクができて参りまして、この「あいさつ」の良風美俗も形を無くしてしまいました。そこで、私は、日本のこの良風美俗を立て直すためにも、「あいさつ」は年長とか若輩とか言わず、むしろ気づいた方から先に「あいさつ」したらと思うようになりました。相手より先に気づくというのは、気づく人の方がエライ人だと思います。

相手は若い人であろうと、女の人であろうと、必ず「あいさつ」には応えてくれるものです。「あいさつ」は、「心のふれあい」の第一歩、コミュニティをすすめる基本だと思います。

これからも、気持ちの良い「あいさつ」を実行して参りたいと思います。

ありがとうございました。

「あいさつ運動」

青少年育成廿日市市民会議（木本文三会長）では、青少年を対象とした数ある事業の中で、これは、青少年に限らず、広く一般に呼びかけている「あいさつ運動」がある。

毎月第三金曜日朝七時～八時の一時間、ＪＲ廿日市駅、宮内串戸駅、阿品駅北口で、通勤通学客に「おはようございます。」と声をかけ、「あいさつ」の励行を呼びかけている。と言えば、「あゝ、あれか。」と、ＪＲ阿品駅利用者なら、誰でも知っている市民運動。雨の日も風の日も、駅前に立って道行く人に声をかけるという地味な活動を続けている。これが、青少年育成市民会議のメンバーである。

さて、この運動、「始めのうちは、声をかけられると恥ずかしいのかテレくさいのか、呼びかけにも応えないで、足早に通り過ぎる者が多かったが、今では、声を出して応えてくれるようになったのが嬉しい。運動をする者にとって何よりの励みになる。これが、この場だけでなく、みんなが、それぞれお互いに“あいさつ”し合うようになってほしいものである。」と木本会長は話している。

―ＪＲ阿品駅北口にて―

大人に「あいさつ」を教えた女子高校生

或る新聞の読者の欄に、女子高校生がこんなことを書いていた。

「登校時によく出会うおじさんに、自分の方から声をかけるのは恥ずかしいけど、或る朝“おはようございます”とあいさつをしたら、その人“なんだ、この子、人違いでもしとるんか？”とでも言いたそうな顔をして、ジロリと見返しただけで通り過ぎてしまった。たとえ、それが人違いであろうとなんであろうと、大人って、何故もっと素直に応えられないんだろうか・・・。大人に、あいさつするのが、“こわい”ような思いすらした。

しかし、その後何度か会うたびに、気持ちの良い返事が返ってくるようになった。」という。この子はエライ！！胸がすくような話である。

同じ町内の人とわかっていても、名前も知らず、勿論、言葉も交わしたことのない人に、自分から声をかけるというのは、勇気のいることだ。ましてや、1度声をかけて返事がなかった人、こわい思いすらしたというのに2度3度と声をかけ、遂にヤッター！！恥ずかしいのは、このおじさんである。

一女子高校生が、大人に「あいさつ」の仕方を教えたという、朝の一コマである。

―広報部―

「青少年育成廿日市市民会議」について

会長　木本文三

皆さんは、青少年育成市民会議をご存知でしょうか。この市民会議が誕生して今年で十三年目を迎えました。

現在の会員数一〇二名、青少年対策部会、家庭対策部会及び環境対策部会の三部会で構成され、地道な活動を続けております。

子供達が、少しでも良い環境の中で過ごせるようにと、お手伝いをさせていただいているボランティア団体であります。

ＪＲ阿品駅利用者の皆さんには、毎月一回は駅前でお目にかかっております。そうです「あいさつ運動」です。この運動も市民会議のほんの一部の活動に過ぎませんが、今年で五年目になりました。当初は、声をかけても一〇％位しか応えてくれなかったのが、今では殆どの人が「おはようございます。」「ご苦労さんです。」と応えてくれます。

通学の高校生も顔なじみになって、笑顔で応えてくれます。微笑ましい光景だとは思いませんか。一つひとつの積み重ねが、多くの心の財産を生み出しているんです。阿品台地区の皆さんの中に、わが市民会議のメンバーが少ないのが残念です。今日は、この紙上を借りて入会のおすすめをしたいと思います。

手続きは簡単です。市役所の教育委員会社会教育課内に事務局があります。ここに申し出ていただくだけでいいんです。一緒にお手伝いをしてくれませんか。そして指導してくれませんか。どうぞよろしくお願い申し上げます。

豆辞典

「あいさつ」（相手をたてる）

「あいさつで　ふくらむ人の和　地域の和」

今回の広報紙「ふれあい」は、山本会長の「ふれあいは先づあいさつから」に始まった。そこで「あいさつ」の語源から考えてみることにした。

この挨拶（あいさつ）は、もともと仏教語から出たもので、「あいさつ」の挨（あい）は「押す」こと、拶（さつ）は「迫る」ことを表している。中国ではこの言葉を「押し合いながら前へ進もうとする。」という意味で使っていた。これが、どうして現在の日本の「あいさつ」の意味になったのだろうか。

「挨拶（あいさつ）」は、日本に入って禅宗で使われるようになった。中国でも元の意味を「お互いに研さんして自分を磨いて行こう。」と言う意味で用いたものである。　また、門下の小僧に問いかけ、悟りの深さを試すこともそう言ったいわゆる禅問答である。人間同士がぶつかり合いを前向きにとらえたのが、昔の日本の挨拶（あいさつ）だったわけだ。

こうした厳しい切磋琢磨（せっさたくま）のニュアンスは、やがて一般化して「礼儀」を示すものに変わり、「言葉を取り交わす」と言う意味が含まれて、現代の「あいさつ」の使われ方になったのである。

現在でも「とんだごあいさつね。」と言う皮肉っぽい言葉や、ソノ筋の「いつかあいさつしてやっからな。」と言う啖呵（たんか）には否定的な意味がこめられているが、実はこうした使い方の方が由緒正しい（？）「あいさつ」だったわけだ。

しかし、もとの「押し合いながら、前に出る。」と言う意味の「あいさつ」と言う言葉を、「儀礼的な対応や言葉」と言う意味で「あいさつ」として使うようになった日本人には、やはり、仏教の奥ゆかしさや、相手を立てる心が感じられる。

（仏教早わかり辞典から）

―山の手　**藤木　宏道**―

もちつき大会

―山の手町内会―

山の手町内会では、昨年十二月一日（日）に恒例行事の「もちつき大会」を行った。

前日まで天気のことが気にかかり、毎日天気予報を見て一喜一憂していたが、そんな心配をよそに師走とは思えない好天に恵まれ、つき手のお父さん達は汗を拭きながらの大奮闘、昔なら、どこの家庭でも見られた光景だろうが、昨今では殆ど見られなくなった。

スーパーで買うもよし、電気もちつき器でつくもよし、手軽に年中食べられるおもちだが、石臼を使って、杵でつくおもちの味は又格別である。

つきたてのもちの食べ方には、地方によって様々であろうが、筆者の田舎では、“ぬりこ”といって、つきたてのもちを一口位の大きさにちぎり、あんこを絡めて食べる。その他、大根下ろしをつけて食べる「下ろしもち」等の食べ方がある。

さて、今回のもちつき大会では、ぜんざい、きな粉もち、下しもち、海苔巻き等を用意した。日頃は小さいお鍋で少しの料理しかつくらないお母さん達が、この日ばかりは大鍋三つにぜんざいをつくり、小豆に水、砂糖、塩加減等々四苦八苦、ちょっと油断して焦げつかせたり・・・、でも、苦労を重ねたものほど味は抜群である。

「おっ！！なかなかやるじゃないか。」　―山の手集会所にて―

今回は初めての試みとして町内会長、副会長がスピーカーをもってPRに奔走し、そんな努力の甲斐あって、大勢の人でにぎわい、大盛況であった。

この山の手ができて7年目、第3回のもちつき大会とあって、次第に皆さんの顔と名前がわかるようになり、友好の場となりつつあることが感じられる。

今後も、みんなの「ふれ合いの場」として親交を深めるためにも、ずっと続けて行きたいと思っている。

（山の手・広報係）

各町内会の諸行事

今回は、山の手町内会の「もちつき大会」を紹介したが、各町内会ともいろいろと趣向を凝らして、それぞれに「ふれ合いの場」をつくるべく努力されている。

主なものを挙げてみると（連合町内会の行事として開催している、盆踊り大会、秋まつりは除く。）

・体力づくり、ハイキング（みかん狩り）―2丁目―
・とんど祭 ―1丁目、2丁目―
・いも堀り ―4丁目―
・ソフトバレーボール大会 ―5丁目―
・文化祭（手芸、絵図、盆栽等々）―5丁目―

その他子供会の行事としては、各町内会とも共通した内容、例えば、お楽しみ会、夜店、秋まつり、クリスマス会、歓送迎会等々……いづれにしても、今後益々、発展し、長続きするように頑張って下さい。

―広報部―

阿品台音頭

作詞　山本　志朗
作曲　津守　豊
編曲　内田　秀明
補作　田尻　達仁

一
ハー春はヨー花咲き初むる阿品台
庭の梅にはうぐいす鳴いて
空にゃつばめが舞い遊び
南宮島陽に映える
ドンドンドドントアジナダーイ

二
ハー夏はヨー若葉にもゆる阿品台
光　緑に　草花開き
海にゃヨットが白帆はり
丘は太鼓がなりひびく
ドンドンドドントアジナダーイ

三
ハー秋はヨー紅葉にしきの阿品台
スポーツ文化のわざきそい
町にゃみこしが跳まわり
菊の香りもふくいくと
ドンドンドドントアジナダーイ

四
ハー冬はヨーふれあいすすむ阿品台
クラブやつどいいきいきと
道にゃ笑顔が語り合い
住み良いふるさと育ちゆく
ドンドンドドントアジナダーイ

五
ハー町はヨーかたいちぎりの阿品台
老いも若きも手をとりあって
今日の喜び分かちあい
明日は希望の日が昇る
ドンドンドドントアジナダーイ

光の園に「ケアハウス・デイサービスセンター」開設

―1丁目・高野昌子―

高齢化社会に対応し、福祉の一環として社会福祉法人「光の園」（廿日市市地御前）に「ケアハウス・インマヌエルホーム」と、「デイサービスセンター」が設置された。

ケアハウスは、二年前からこの制度ができて、全国的には、平成三年度中には4、700人分が設置され、広島県では、東広島市に定員五十人が、そして当地光の園に定員三十人が初めて設置された。

光の園には、養護施設「光の園摂理の家」が隣接しており、地域の中で、子供達とお年寄りのふれあいによって、互いにプラスになるのではないかと期待され、注目を集めている。

デイサービスセンターは、主に在宅のお年寄り、病弱及び寝たきり老人の方々へのサービスを行い、お年寄りの生活の援助、社会的孤立感の解消、心身機能の維持向上を図り、御家族の方々の身体的、精神的負担の軽減を図ろうというのが目的で、サービスの内容としては、入浴サービス、給食サービス、生活指導、日常作動訓練、養護家族介護者教室、健康チェック等で、利用者には、専用のバスが送迎する。

詳細についての問い合わせは
・社会福祉法人　光の園　39―1405
・廿日市市福祉事務所　32―0121（内線136）

川柳

山の手　森川抜智　作

元旦に80才の顔洗い
赤ちゃんを抱けばかすかに乳匂う
酒買うて仔犬忘れて帰りかけ
お魚も野菜もみんな旬はずれ
温泉でお猿は今年の初風呂だ
阿呆にさえなって居ったら円満だ

◆お詫びと訂正◆

前号の「ふれあい」（第13号）「老人クラブ千寿会の紹介」の項・

・紹介者の氏名
　正「高野健三郎」
　誤「高野国彦」
・町内会からの補助金
　正「70、000円」
　誤「7、000円」

右のとおり誤りがありました。ここに、お詫びをして訂正します。

高野さん　大へん失礼しました。

―広報部・竹下―

◆編集後記◆

この「ふれあい」（第14号）読んでいただけましたか。今後の参考となるお気付きの点があれば、事務局（公民館）までお寄せください。

今回、特別寄稿をお願いした青少年育成市民会議の木本会長さん、それに、取材に編集にご協力を頂いたスタッフの皆さん、ありがとうございました。

―広報部・竹下―